

二六一四番

眉寝搔きまよねか 下いふかしみした 思へるにおも 古人をいにしへひと
相見つるかもあひみ

二六一五番

しきたへのまくら 枕をまきて 妹と我といも あれ 寝る夜はぬ よ
なくて 年そ経としへにける

二六一六番

奥山のおくやま 真木の板戸をまき いたと 音速みおとはや 妹があたりのいも
霜の上しも うへに寝ぬね

二六一七番

あしひきのやまびくらと 山桜戸を 開け置きてあ お 我が待つ君あ ま きみ
を 誰か留たれ とどむる

二六一八番

月夜良みつくよよ 妹に逢はむといも あ 直道からただち 我は来つれわれ き
ど 夜そふけにけるよ